



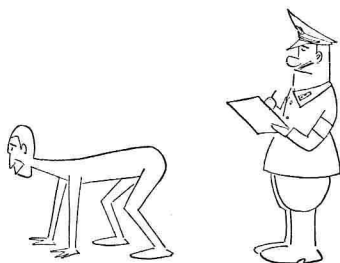
良友・悪友 ■ 安岡章太



良友・悪友 ■ 安岡章太郎

良 友 ・ 悪 友

校印は廃止させていただきます。



Shataro Y.

定価 380 円 著者／安岡章太郎 発行者／佐藤亮一 発行所／株式会社・新潮社
／東京都新宿区矢来町71／電話東京(260)1111(代)／振替東京808 発行／1966. 4.
30 6 刷／1966. 7. 20 印刷所／株式会社・金羊社 製本所／大進堂製本所
<乱丁・落丁本はお取りかえ致します>

© Printed in Japan

目

次

二代目たち	三浦朱門と石浜恒夫……………	セ
柴田錬三郎についてのスコンの観察……………		三
「ウソ」の殉教者遠藤周作……………		元
吉行淳之介と自動車の関係……………		セ
近藤啓太郎の風雅なる才能……………		九
三番センター庄野潤三君……………		二九

金を想うごとく友を想う 邱永漢……………一元

練馬大王 梅崎春生の死……………一元

なるほど奇妙な小島信夫の「なるほど」……………一元

開口一番 開高健……………一元

昔の仲間……………二五

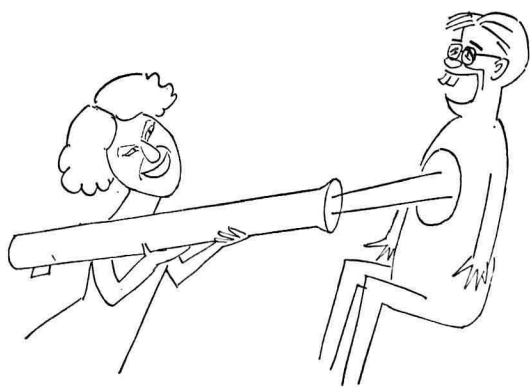
あとがき……………三六

装幀・カット 横山 泰三

良友・悪友

二代目たち

三浦朱門と石浜恒夫



三浦朱門という名前は、たいそう珍しい。——この名前のおかげで、オレはどんなに迷惑したかわからないというが、私もこんな名前をつけられたら、自分の親父を恨みたくなっただろう。

しかし、この三浦の嘆きは多少とも裏返しになった誇りのようなものかもしれない。すくなくとも軍人の息子である私からみると、こういう凝りに凝った命名をする父親のいる家庭には、いろいろの意味で自由な空気が吹きぬけていただろうな、という気がするのである。——「自由な空気」とは一体どういうものか、と訊かれてもこまる。ひとくちにいつて、それは戦前から「戦後」の気風をもった家庭ということだろうか。つまり三浦は二代目の文化人なのだ。

戦前、「セルパン」という一種の文化総合誌があった。春山行夫氏や、亡くなった十返肇氏が、編集に当たっていた。型もページ数も、いまの「風景」ぐらいだが、本屋でオマケにくれるようなものではなく、堂々と定価十センで駅の売店などにもならんでいたから、内容は「風景」などとは違って、もっとドギつく、活気もあって、いまの「週刊新潮」のタウン欄だけを集めたら、あんな雑誌になるのかもしれない。——三浦のお父さんは、その「セルパン」の初代の編集長だった。しかし、そういう具体的なことは、三浦の口からは一度もきいたことがないので、私は彼の結婚式によばれるまで、ちっとも知らなかった。私をはじめて高円寺にあった三浦の家へ遊びに行ったとき、廊下の隅の本棚に三浦のお父さんの名宛の署名本が日にさらされたまま何十

冊となく無造作に積み上げられてあるのを、めずらしそうに眺めていると、三浦はいくぶんイラ立たしげに、

「よかったら、そんなもの、どれでも持つてつてくれよ。始末にこまるんだ」

と言った。私は早速、堀口大学訳のシュペルヴィエール短編集など、何冊かを貰って行くことにしたが、みんな紙質も装丁も立派な本ばかりなので、本当に貰ってもいいものかどうか、何度も訊きかえさずにはいられなかった。すると三浦は、「かまわないったら、かまわないんだよ」と、どなるように言うのである。

要するに、息子にとって父親の職業というのは、一種の恥部なのかもしれない。私にしたって、もし家へ遊びにやってきた友達が、私の父の古い階級章だのサーベルだのに、もの欲しげな興味を示したりしたら、やはりこのときの三浦と同じ顔つきになっただろう。そういうふうに翻訳して考えると、三浦の気持もわからないことはない。

「ものを書いて売ってくらすやつも、それを買って商売するやつも、世の中で一番どうしようもない連中だぜ」

三浦がこんなことを言うのは、たぶん私に対するアテコスリもあったかもしれない。そのころ私は勤めをやめて、イチかバチか原稿料だけでくらしはじめようとしていたから。しかし、それと同時に浮草稼業への嫌悪とか不安とかいったものが、よほど深く身にこたえているのだろうかとも思った。それなら何で三浦はもっと他の職業を選ばないのだろう——、そう訊くと、三浦は

簡単に言いかえた。

「それは、ものを書いてくらすのが一番ラクな商売だからさ」

どっちにしても三浦は、子供のときから文筆業者のウラおもてを見ながら育った。それだけ、彼は私たちのなかで誰よりも早くから文壇的生活意識を身につけていたはずだ。私が三浦とつきあい出したのは、ある日、突然、彼から会見を申しこまれてきたからだ。そのころ私は、まだ短篇小説を二つほど発表したばかりだったが、その一つは三浦と並んで文芸雑誌の新人特集号に出たものだったから、私も三浦のことは多少気にしていて、早速、申しこみに応じて、日比谷の喫茶店で落ち合うことにした。——といっても、顔も知らない同士が街で出会うためには、何かの日印が必要だ。それで私は「セビロの襟に赤い花、それが恥ずかしければ掌大の木の葉をつけて行くように」と提案した。こんなことを言い出したのは、私自身も未知の新人作家と会うことに、大いに好奇心をもやし、昂奮していたからである。

当時、私はレナウンという婦人向きのセーターなどをこしらえている会社でアメリカ、フランスなどの流行服飾雑誌の翻訳係りをやっており、発表した短篇小説も、そういう都会的フンイキを反映したハイカラがかったところがあったが、私自身の風采はすこしも私の書くものに似ていなかった。第一、気取ろうにも金はなかったし、おまけに背骨のカリエスが治っていなかったのでシャツの下には、いつも甲羅をしまったように固いセルロイドのコルセットをつけていたか

ら、ちょっと身動きするたびに、垢じみた肌とコルセットの間に溜った生温かい空気が、シャツの襟もとや袖口からフィゴのように吹き出して、そばにいる人の鼻先に汗と体臭のこもった風を送りつけることになっている。その日も私は、友達にもらった古いダブダブのセビロの下に破れたセーターを着こんでいた。——三浦の手紙には、「どうも『戦後』の文学というのは、みんなワザと汗臭い下着を見せ合ってよるこんでいるみたいですが、ボクは紳士ですから、そういうものとは断乎としてつきあいたくないのです」と書いてあり、こういう恰好で出掛けたら、さぞかし三浦という男は仰天するにちがいない——、と、いくらかイヤガラセの興味もあったのだ。

待ち合せの場所を、日比谷の「セ・シ・ボン」という喫茶店にしたのも、そのころはよく映画女優のアベックなどもやってきて、ハイカラな派手な感じがする店だったからだ。そこに私のような男がヌーツと現われたときの効果を計算したつもりだったのである。——ところで、この計算は半分ぐらいしか合わなかった。たしかに三浦は、私の姿をみとめると、机のコップを倒しそうになるほど驚いた様子だった。しかし、その三浦が半分腰を浮かせながら、胸につけた葉っぱをはずすと、くしゃくしゃに丸めて灰皿につっこみ、

「ボク、三浦シモンです」

と、舌のもつれるような声でいうなり、真っ赤な顔をして、ズボンの膝頭を合せるのをみると、どうしたことか私自身、突然、頭がクラクラするほど恥ずかしくなってきた。

ここにいるのは、おれの同類項だ。私は三浦をながめた瞬間そう思った。——本当をいえば、

三浦は私よりもずっと身長も高いし、背筋も真直ぐで、着ているセビロも細目の襟のピンとしたスマートなやつだ。ワイシャツも真っ白だし、ネクタイもキチンとしたやつを締めている。おまけに顔の色も雪国の人の肌のように透きとおったピンクで、すこし赤味があった柔らかそうな頭髪は、きれいに分けて撫でつけてある。要するに、それは昼間の銀座通りなどでよく見掛ける、上から下までたったいま洋服の函から出てきたような恰好をしている青年と、すこしも変らぬ身なりであった。そんな三浦が、どうして私の眼に自分の同類項のようにうつったのか？ じつは三浦は、そのととのった服装にもかかわらず、いや、それだけに一層、彼の内側にある何かしら生グサイものが、眼や口もとや体全体に、妙にねっとりとして漂っているからだ。

生グサイといったって別に三浦の体から実際に、そんな臭いが発散したというわけではない。ただ私は彼の体に、私と同じ体臭、同じ息づかい、同じジクジクした耳垢を感じたのだ。――一体そんな感じはどこからくるのか？ これは私にもうまく説明がつかない。いつてみれば、それは空想力や感受性をもてあました人間に特有の体質なのだ。にもかかわらず当人の三浦は一生懸命、自分とは正反対のタイプの、たとえば騎兵中尉の軍服でも似合いそうな人間になろうと、ノリで固めたカラーで首を絞め上げたりしてガンバっている。

私は、そんな三浦に落胆ともつかぬ狼狽をおぼえ、おたがいに場違いのところに坐らされているような恥ずかしさも手伝って、しきりに大声で話しはじめた。すると三浦も、私が何か一と言いうたびに、大きな前歯を二本つき出して笑いながら、すぐ同じことを別の言葉でいいなおし

た。

そのときの私は、きつといくらか女性的な気分になっていたのかもしれない。すくなくとも、それは「見合い」のフンイキに、ひどく似ていた。初対面であることもそうだが、相手の体臭や体質を気にしたり、理解し合おうとつとめながら、こっそり相手を評価し合っている会話の内容などもそうだった。おまけに三浦のとなりに、顔の青白い男が一人、むっつりと押し黙ったまま、われわれの会話に耳を傾けるような、そのくせ何も聞いてはいないような、何か場馴れした態度で坐っているのが、いわばナコウド役のようにも見える。

「ご紹介しておきます。これ、石浜恒夫くんです。『ギャング・ポウエット』……。しかし人柄はボクと同じで紳士ですから」

三浦は、ちよつと横をふりむいて、そう説明したまま、またもとにもどって、その男と関係のない話をつづけた。「ギャング・ポウエット」と馬鹿にスゴんだ題名のついた小説と、その青白い顔の男とは、最初なかなか私の頭の中ではつながらなかった。しかし、話の途中でふと憶い出して、

「たしか、あれは織田作の未亡人といっしょになっているという……」

と何の気なしに、三浦に向かって問いかけると、その男は、突然、頭を掻きむしりながら、けたたましい笑い声を発すると、

「そりゃ、それはボクのことや」

と、大声で言って、それから「ふーッ」と鼻毛のそよぐほど荒い息を一つもらすと、腕組みしたまま、また黙りこんだ。

石浜恒夫は、三浦とはちがったタイプの男だが、彼もまた二代目の文化人である点では共通していた。父親は京大の文学部の教授で、その教え子には作家や文学者がたくさんいるし、叔父に当る藤沢恒夫氏も同じ家に住んでいた関係で、三浦の話では石浜の家そのものが関西文壇の一角になっているような印象をうけた。

「藤沢恒夫の『新雪』って小説、あれは石浜の家がモデルになっているんだぜ。あの中で、ほら、映画だと月丘夢路の弟になる旧制高校生が出てくるだろう。あれが、つまり石浜のことなんだよ」

三浦は文壇だの、売文業だののことは軽蔑しきっているようなことをいうくせに、こういうことは、じつによく知っていた。……「新雪」は戦時中に出たほとんど唯一の明るい家庭小説として評判になったものだから、私も毎日の新聞で読んでいたし、映画もみていた。そういえば、あの小説に私と同じ年ごろの高校生が登場し、月丘夢路の姉と水島道太郎の小学教師の間を、いろいろと取り持ったりする役を演じたのも憶えている。いかにも明るく、健康で、秀才のように描かれていたあの「弟」が、いま眼の前で青白い顔をして坐っているこの男かと思うと、やはり奇妙な気持になった。